

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653060

 研究課題名（和文） 出産・育児体験ディスコースに見る女性の意識と社会・文化環境：  
日英米比較研究

 研究課題名（英文） A comparative study of women's consciousness represented in  
narratives about childbirth and childcare experiences:  
A comparative study among the UK, the U.S. and Japan

研究代表者

秦 かおり (HATA KAORI)

立教大学・外国語学部・講師

研究者番号：50287801

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本社会において子どもを産み育てやすい環境づくりの上で求められる出産・子育て支援とは何かを、女性自身の意識環境を調査することで明らかにした。調査方法に対面インタビューを採用し、その録音録画データを言語人類学・言語社会的観点からナラティブ分析・マルチモーダル分析の手法で分析した結果、育児分担の平等性や制度・設備ではなく、社会構成員個々人が育児参画に積極的に取り組むべきという規範意識の徹底が、女性の母としての自己肯定感を生み出す土壌となり、それが産み育てやすさに繋がっている事が明確となった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore the normative consciousness of Japanese women and the society in which they live in order to explore the nature of the environment which helps women to comfortably give birth to and raise their children. In order to accomplish this purpose, a series of interviews in an active interview format were conducted with Japanese women living inside and outside Japan. Multi-modal and narrative analysis from a linguistic-anthropological and sociolinguistic perspective was taken as the method of analysis. The study reveals that it is the adequate internalization of the normative consciousness - a belief in which all individual in society should take active parts in child rearing - that constitutes the positive self-image of women as mothers. And that it is the positive self-image that leads to the sense of comfort in childbirth and child raising experiences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	480,000	3,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ナラティブ研究、日本人女性、出産・育児体験談、語用論、言語人類学、女性とことば、社会言語学、アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 当該研究は当科学研究費取得に先立ち、2007年より開始された。異文化環境での出産育児体験をもつ調査者が、日本における出産・育児の困難に直面し、子どもを産み育てやすいとはどういう事かを解明しようと立ち上げたプロジェクトであった。当初の国内調査により、その社会文化によって構築される規範意識の問題が「育てやすさ・育てにくさ」に大きく影響していると考えられた事から、異文化環境である米英で出産育児を行う日本人女性に調査の幅を広げ、比較分析を行う必要性が生じた。

(2) 研究開始当時、日本における出生率は1.3を割り込み、少子化は深刻な事態を迎えていた。産休・育休の促進や育児に積極的に参加する男性を賞賛する風潮など、様々な制度的・社会的な追い風があるにも関わらず、その傾向は悪化の一途を辿っていた。本研究では、先行研究で得られた知見から、その原因の一端は、女性達自身の規範意識であり、その規範意識は社会文化という外的要因から形成されていると仮定した。

(3) 研究開始当初の学術的背景として、ナラティブ研究の隆盛が挙げられる。その中でもインタビュー・ナラティブの研究は主流の一つであり、そこではインタビュアーの影響を最小限に留めようとする従来の方法ではなく、インタビュアーも参加者の1人として、その相互行為を分析する。インタビューという場における相互行為としてのナラティブからその社会文化における自己の立場とアイデンティティを探る方法が、特に欧米を中心に確立されつつあったが、日本においてはまだ紹介の域に留まっていた。

## 2. 研究の目的

本研究は次の2つの目的を標榜する。

(1) 日本社会における「子どもを産み育てやすい、女性あるいは社会の意識環境とは何か」を明確にし、社会に提示することである。近年日本で出生率が上がらない要因の一つとして、女性自身の中に埋め込まれた意識的無意識的な社会規範意識や役割意識の存在があると位置付け、その実態と変遷を女性の出産育児体験談を通して明らかにする。また、調査地域として日本国内外に拠点を設定し、国内地域比較・国際比較を行うことで日本社会の特性を明示することを目的とする。

(2) 幾つかの学問分野に属する研究者がそれぞれのアプローチを出し合い、分野を超えて一つの社会的目標達成のために連携するモデルケースを示すことも目的の一つである。具体的には言語人類学、社会学、社会言語学、コミュニケーション学における分析的理論的背景を持つ研究者がデータを共有し、視点の融合を目指す。

## 3. 研究の方法

本研究は主として3つの柱を立てて進められた。

(1) インタビュー調査によるデータ収集  
社会的文化的規範の影響を受けた規範意識とアイデンティティを探るため、インタビュー・ナラティブを分析した。段階的に日本国内2拠点（東京圏、北関東）及び英米各1拠点において出産体験のある女性へのインタビュー調査を行った。インタビュー方法は、事前調査においてインタビュアーとインタビューの1対1方式よりも、インタビューが2名もしくはそれ以上の場合に、より複雑で真意と考えられる相互行為が現れやすい事が証明されていることから、複数間のディスコース形式をとり、定点カメラと録音マイクによって、録画録音した。そのデータを分析し、そこから実際に出産・育児をする際の具体的問題点を探ると共に、地域比較、国際比較による制度的意識的な構造の問題に焦点を当てた。具体的には、2010年度は国内拠点での調査とともに、英国在住日本人コミュニティでの調査を行い、2011年度には英国人への調査で比較を行った。また並行してフォローアップインタビューを実施し、その成果をもって、米国在住日本人及び、同コミュニティに所属する米国人女性へのインタビューも敢行した。

(2) プロジェクトチームによる分析と考察  
前述の通り、様々な学術的背景をもつ研究者が集い、分析と考察を行った。特に、インタビューの方法論が研究分野により異なるため、本研究において最も適切な調査方法とは何かという問いに答えつつ、データの解析に努めた。

(3) データベース化

本研究では主として映像データを蓄積した。ただし、個人情報保護の観点から、映像データを一般公開することは避け、公開可能な範囲を策定することとした。

## 4. 研究成果

上記の研究方法に則って研究を敢行した成果は下記の通りである。

(1) 研究の主な成果

① 国内外におけるインタビュー調査

科研取得期間中の調査件数は下記の通りである。

	国内	英国	米国
2010年度	18	29	0
2011年度	2	22	0
2012年度	2	11	12
合計	22	62	12

(数字は実数。例えば、年度をまたいで同一人物に2度インタビューをした場合は2と数える)

これに先立ち、科研取得以前に国内在住の日本人女性 29 名にインタビューしているため、研究としての国内のインタビュー実数は 51 件である。

## ② データ分析・考察

データの分析については、秦かおりが社会学・社会言語学、井出里咲子と岡本多香子が言語人類学に基づく視点を出し合い、データをアクティブ・インタビューのデータと位置づけて、インタビュアーも含めた参与者全員のインタビューの場における相互行為を分析した。

日本の国内調査においては、既に都心部での調査が科研取得前に終了していたため、科研期間中は原則として農村(酪農)地域に焦点を当てて調査を行った。そこでは、働き手としての役割を担い、子育ての主体者になれない社会規範の中で苦悩する 60 歳以上の高齢世代が、母としての自分を否定する姿、さらに現在子育てを行っている「若い世代」との間の差異と、それを埋めるための言語的非言語的な努力と葛藤を描き出した。一方、都心部の調査においては、求められる母親の役割像は比較的一貫しており、世代差に加えて、その地域で主流である職業による差が激しいことが裏付けられた。

英国調査においては、産院の整備、保育園・公的サポートなどの環境が整っておらず、実際の英国の育児環境は日本に比べて整備されているとは言えないことが明らかとなった。それにもかかわらず、インタビュイーは母としての自己肯定感を保持していた。分析結果から、その理由は、育児分担の平等性や、制度や設備に依らない社会構成員の個人の規範意識の徹底による精神的・個人レベルでの子育て支援にあると結論づけた。その傾向は、日本在住の研究者であるインタビュアーを前にしたインタビューの場での言語・身体言語にも顕著に表された。待遇表現、引用、スモールストーリー、笑いなどを分析して現れたこれらの特徴は、規範意識としては現在居住している英国

という社会の規範意識を保有しながら、インタビューの場としては日本の規範に則って話さなければならないという二律背反性を作り出していることを示した。

米国調査は、東日本大震災の影響で、計画よりも1年先送りになり、調査実施が2012年度にずれ込んだことから、詳細な分析は2013年度に行うこととなった。

## ③ 成果発表

3年間で合計21件の学会発表を行い、それが学界への主たる成果発表となった。2013年に出版予定の編著『ナラティブ研究の最前線：テキストから社会実践へ(仮)』では、秦かおり、井出里咲子、岡本多香子がそれぞれ論考を掲載しており、これらは研究者、大学院生だけでなく、学部学生や一般国民も対象として編まれている。これから出産・育児を行うあるいは支援する世代である若年層が手に取れる著書を出版することで、本研究の成果が実社会へ貢献する機会になると考えている。

## ④ データの電子処理化

インタビューの多く(インタビュイーに拒否された場合、録画に失敗した場合を除く)は、録画録音されており、その多くが電子処理化及びスクリプト化されている。96件(科研取得前も含めれば125件)という膨大なデータは、まだ全ての分析・考察が済んだとは言えず、将来に向けての重要な素材として保管するものである。

## (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究では、得られた成果の国内外における位置づけとインパクトについては、①日本社会における位置づけとインパクト、②当該研究分野への貢献の大きさ2つに分けられる。

### ① 日本社会における位置づけとインパクト

現在日本社会では、政府が3年間の育児休暇を検討し始めるなど、制度面では出産・育児の環境を整えつつあると言えるにもかかわらず、少子化が止まらない。これを解明する一端として、本研究でみられたように、子どもを産み育てやすい社会とは、産む当事者の自己肯定感が土壌であり、それはその当事者が所属する文化社会における社会規範と社会構成員の規範意識として、子育てを支援するのが当然になる必要があると考えられる。調査で英国在住の日本人女性たちが「育てやすさ」の一例として挙げたスモールストーリーでは、電車やバスといった公共機関の使いやすさ、外出のしやすさ、母の休養時間の確保、夫婦の時間の確保が当然のこととして語られている。これらの実地調査に基づく結果を著書などで周知することで一つのインパクトを生み出し、社会構成員の意識改革に繋げたい。

## ②当該研究分野への貢献

インタビュー調査を使ったアイデンティティの研究に関しては、社会学、社会言語学、心理学、人類学などの分野を中心に多くの研究成果がみられる。しかし、インタビュー・ナラティブを相互行為と捉え、そこに現れる言語・非言語使用を調査した研究は、日本においては数少ない。インタビューにおいて立ち現れた現象をその場その場で揺れ動くものとして捉えつつ、その場から切り離れた一つのアイデンティティでもあるとした Bamberg のポジショニング分析や、ライフストーリーのような大きな流れを形成する語りではなく、語りの中に差し挟まれる語りこそ分析すべきという Georgakopoulou のスモールストーリー分析を日本のインタビュー・ナラティブに用いて分析したことは、当該分野に新しい見解をもたらしたと言える。それらの研究成果は、当該研究分野の国内外の学会で随時発表しており、国外においては日本文化理解に貢献し、国内においては、当該学問分野への分析手法の一例を紹介するという貢献を果たしたと考える。

## (3) 今後の展望

今後の展望としては、①現在のデータの解析、②共同研究者3名での成果の書籍化、③新たなトピックの設定が挙げられる。

### ①現在のデータの解析

前述の通り、調査を実施し電子処理しながらも、分析・考察がまだ未処理のデータがあり、これらを分析・考察していくことが一つの大きな課題である。

### ②共同研究者3名での成果の書籍化

2013年度出版の編著では収まらなかった、本研究の全体像を紡ぐ共著の出版を予定している。

### ③新たなトピックの設定

本科研期間中に東日本大震災が起こり、それに伴う放射能汚染の問題など、出産・育児環境においてもその影響は大きい。当初は予定していなかったこの点について、2012年度にはパイロット的にインタビュートピックの一つとして扱ったところ、特に海外にいるからこそ感じる不安や一体感などが浮き彫りとなった。またそれと同時に、実際に得ていた情報はNHKのU-streamなど、国内と同じ映像であり、震災当初から得ていた情報に国内外でそれほど差がないことも分かった。今後は、これらの身体的距離と情報均一性の乖離がその後の対応に及ぼした影響

について、インタビューの中から探っていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 秦かおり、佐藤彰、井出里咲子、岡本多香子、饒平名尚子、ナラティブ研究の多様性を超えて：その展開の行き先を考える(ワークショップ報告書)、社会言語科学、査読無、第15巻第2号、2013、99-105
- ② 秦かおり、岡本多香子、Anna De Fina & Alexandra Georgakopoulou(著) Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives(書評)、社会言語科学、査読無、第15巻第2号、2013、66-70
- ③ 秦かおり、How Can We Reconstruct Normative Consciousness in Our Daily Life?: A Case Study of Interview Narratives of Japanese Women Living in the UK、International Symposium on Language and Communication: Research Trends and Challenges 発表論文集、査読無、2012、801-808
- ④ 秦かおり、英国在住の日本人女性にみる規範意識の表出と言語使用：インタビューによる日英比較調査をもとに、立教大学ランゲージ・センター紀要、査読無、第25巻、2011、15-22

[学会発表] (計21件)

- ① 秦かおり、Clear Messages without Clear “Representations”? : The Strategic Conversation Style Used by Japanese Women Living in Intercultural Situations、Japan Anthropology Workshop 2013、2013年3月9日、ピッツバーグ大学(米国)
- ② 秦かおり・佐藤彰、ナラティブ研究の多様性を超えて：その展開の行き先を考える(ワークショップ共同企画)、第30回社会言語科学学会研究大会、2012年9月1日、東北大学
- ③ 秦かおり、「何となく合意」の舞台裏：規範意識の再構築プロセスに現れるストラテジー、第30回社会言語科学学会研究大会、2012年9月1日、東北大学
- ④ 井出里咲子、ナラティブの協働形成とパフォーマンス、第30回社会言語科学学会研究大会、2012年9月1日、東北大学
- ⑤ 岡本多香子、「時代変化へのジレンマ」：栃木県農村部で出産育児を経験した女性のインタビューナラティブにみる言語・被言語記号に指標されるもの、第30回社会言語科学学会研究大会、2012年9月1日、東北大学
- ⑥ 秦かおり、How can we reconstruct normative consciousness in our daily life?: A case study of interview narratives of Japanese

women living in the UK、International Symposium on Language and Communication: Research Trends and Challenges、2012年6月11日、イズミル大学(トルコ)

- ⑦ 秦かおり、インタビューナラティブを分析する：英国在住日本人女性のナラティブ分析を一例として、筑波大学大学院講義(招待講演)、2012年2月2日、筑波大学
- ⑧ 岡本多香子、「農家の嫁」であることのジレンマ - 栃木県央の一農村部に住む50~60歳代女性へのインタビューナラティブをダイアロジックに分析する、筑波大学大学院講義(招待講演)、2012年2月2日、筑波大学
- ⑨ 秦かおり、岡本多香子、Completed stories / uncompleted stories: ナラティブの意味構築に作用する語り手の心的態度をデータから見る、話し言葉の言語学研究会第3回ワークショップ、2012年1月7日、慶應義塾大学
- ⑩ 秦かおり・岡本多香子、日本人女性の出産体験談 vs. 育児体験談：ナラティブの性質による意味構築プロセスの違いについて、第28回社会言語科学会研究大会、2011年9月18日、龍谷大学
- ⑪ 秦かおり、佐藤彰、Language use in Japanese women's narratives on marriage, childbirth and childcare (パネル共同企画)、第12回国際語用論学会国際大会、2011年7月5日、マンチェスター大学(英国)
- ⑫ 秦かおり、A dilemma and mismatch between normative consciousness and language use: A case study of interview narratives of Japanese women living in the UK、第12回国際語用論学会国際大会、2011年7月5日、マンチェスター大学(英国)
- ⑬ 岡本多香子、Dilemmas of Mothering in a Farming Community in Japan: A Study to Analyze Interview Narrative of the Japanese Female Farmers who Experienced Childbirth and Childcare、第12回国際語用論学会国際大会、2011年7月5日、マンチェスター大学(英国)
- ⑭ 井出里咲子、Telling stories in interviews: Stance-taking in narrative performances、第12回国際語用論学会国際大会、2011年7月5日、マンチェスター大学(英国)
- ⑮ 秦かおり、異文化におけるアイデンティティ獲得プロセスと言語使用：英国在住日本人女性のナラティブ分析、「言語と人間」研究会6月例会、2011年6

月4日、立教大学

[図書] (計1件)

- ① 秦かおり・佐藤彰(共編)、秦かおり(著)、井出里咲子(著)、岡本多香子(著)、ひつじ書房、『ナラティブ研究の最前線：テキストから社会実践へ(仮)』、2013年8月刊行予定、312頁

[その他]

ホームページ等

<http://www.hatakaori.com/narrativestudies>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

秦 かおり (HATA KAORI)

立教大学・外国語学部・講師

研究者番号：50287801

### (2) 研究分担者

井出 里咲子 (IDE RISAKO)

筑波大学・人文社会科学部研究科(系)・

准教授

研究者番号：80344844

### (3) 研究協力者

岡本 多香子 (OKAMOTO TAKAKO)

日本女子大学・家政学部・非常勤講師